

研修報告書 No.16

研修先： 嶺北中央病院

高知県の北の端、徳島県と愛媛県に接する嶺北地域に位置する嶺北中央病院にて地域医療研修をひと月の間、行いました。嶺北中央病院は吉野川のほとりに建っており、吉野川は私たち香川の命の源である早明浦ダムから流れてきているということで、親近感の湧くような光景を見ながら研修を行いました。

今回の研修のテーマのひとつに、地域の病院にて検査手段が少ない状況で如何にして診療を行うかを学ぶということがありました。しかし、病院の設備の説明を受けると、MRIやCTを撮る必要が生じたときは診療放射線技師の方が24時間対応できる体制が取られており、思っていた地域とは違うということが正直な感想でした。

一方で、大川村診療所や汗見川診療所にて、診察などを行ったときは、その場で使用することのできる薬剤は限られており、患者さんのカルテも紙媒体で記入に時間がかかるため、何が大切かを抽出する必要があると、電子媒体よりはるかに労力が必要であると感じました。頭の中で鑑別を描きながら、何を聞いてどんな身体診察を行うか。いつもは血液検査や画像検査があるからそこで確認しようと思いつつながら、診察を行うことができるのですが、除外疾患を医療面接と身体診察で選別していくことを要求され、なかなか難しいものがあると感じました。ただ、受診される患者さんの顔ぶれはあまり変わらず、人数も少ないため、生活環境や家族がどういった方などの情報を先生方もご存じで、大きな病院より患者さんとの距離感がとても近く、状態の変化にはすぐに気づくことができると感じました。

患者さんとの距離感が近いというのは診療所だけでなく嶺北中央病院に来られる人も同様で、入院患者のカンファレンスでは名前をだすと、大体の患者さんのことを昔から知っているようで、地域とのつながりが本当に近いということを感じました。患者さんと病院の間の距離感が近いだけでなく、病院内でも職員同士の距離感が近く、活気があると感じました。私が臨床研修を行っている病院では、掃除の方と挨拶を交わすことはあれど、立ち話を何分もすることはありませんでした。地域だからということはありません。嶺北中央病院ならではの雰囲気なのかなと思います。

また、訪問診療では、周辺の医療機関や介護施設、ご家庭へと軽自動車にて向かいました。道は険しく、片方は崖。車一台やっと通れる道をドキドキしながら向かいました。患者さんは著変なく、穏やかに暮らされていましたが、もし夜間に急変が起きたら、救急車はこんなところまで来ることはできるのか、その急変が待てるものなら、まだいいですが一刻を争うようなものであった場合はどうなるのかと疑問は残りました。ただ、ここでも患者さんと医療従事者の関わりが強く、信頼を置いていることがよくわかり、急変には敏感に対応することができるだろうと感じました。

この研修にて感じたことは、地域の病院だからと言って、検査項目は大きな変化はないということと、患者さんと病院の間のつながりが強く、職員皆が同じ方向を向いて、仕事を行っているということです。距離感が近いため、患者さんの状況の変化もとっさに察知でき、医療スタッフの方々とのやり取りがスムーズであるため、対応を迅速に行うことができるというのが地域医療の強みではないかと感じました。